北海道科学大学研究紀要
第43号(平成29年)
研究報告

Bulletin of Hokkaido University
of Science, No.43(2017)
Research Reports

北海道遺産に選定されている江差町地域文化資源の持続可能性に関する調査研究

Study on the sustainability of Esashi regional cultural resources selected as Hokkaido heritage

濱谷　雅弘*
Masahiro　Hamaya

概要

北海道遺産にも選定されている道南江差町の重要な地域文化資源の姥神大神宮渡御祭(以下,姥神さんと称する)は370年も続く道内で最も古いお祭りである．この全道で最も歴史があるお祭りも近年の少子高齢化と人口減少の進展などにより，存続が危惧され始めている．その現状は，姥神さんの開催時期（毎年8月9～11日）に12年前から継続している本学生の地域貢献･交流活動を通じて,山車に関わる地元の若者や子どもたちの減少傾向などが徐々に明らかになった．よって，本研究ではその実態を学生たちの社会調査実習を兼ねた現地調査や江差町民との交流活動などにより，全町アンケートの実施と人口動向など各種データを収集し，姥神さんの今後と持続可能性に関して分析する．最終的には極めて貴重なこの地域文化資源の保存と持続性に関する調査結果を取りまとめ，江差町及び関係機関･団体や町民と共に地域文化資源の将来の在り方について,具体的な対策を構築することが目的である．

1. はじめに

我が国の地方自治体の多くが少子高齢化,人口の減少,地域経済の衰退という問題を抱えている．函館市や松前町に近い,道南の江差町もその一つに過ぎないが1980年の人口から2015年までの35年間の人口減少数とその減少率をみると驚愕してしまう.実に1980年当時の13,930人の人口が35年間で8,248人まで減り，実に5,682人,40.7%も減っているのである.

このような急激な人口減の町で現在でも各町内会，山車保存会により13台もの山車が毎年姥神さんで町内巡行されている．このことに本研究では着目し，山車を数十年数百年も維持･保存するだけでも大変な技術と費用,人力がかかるこの姥神さんは，いかにして維持・運営されてきたのか，これからも末永く持続していくためには何を検証し，どのような対応策を練る必要があるのかなどについて江差町民と共に時間をかけ，実態把握を基本に以下の調査等の流れと内容で探っていくものとする.

図1　神社前に集合した各町内の山車［H27年8月］

①町の年齢別人口・世帯数等の動向調査と将来推計を既存データにより実施
②江差町の産業構造を明らかにし，特に観光産業分野における観光資源と観光入込客数の動向調査を実施
③山車（全13台）の保存会がある各町内別の人口・世帯数等の動向調査を実施
④町内別の姥神さんに対する意識と関わり方の実態等に関する全町民アンケート調査の実施
（＊本研究調査の最重要項目）
⑤姥神大神宮祭典協賛実行委員会役員，山車巡行責任者，頭取や若者頭経験者へのヒアリング調査の実施

H27度後期からH28年度前期までの本研究の調査やデータ分析による研究はここまでとする．特に山車を保存管理している各町内の住民に対するアンケート票は2,000票を戸別配付し，回収率は18%であった．また，長く姥神さんを支えてきた町の長老，実行委員会役員の方々など関係者からの将来に向けた熱い思いや危機感が詰まったヒアリング調査結果は,町民意識(アンケート結果)とのギャップも垣間見ることができた.

2. 人口動向

江差町の人口は，H8年3月31日現在で11,207人,10年後のH18年同期では10,003人,更に10年後のH28年同期では8,109人と20年間では3,098人減少している．H8年時との比較では20年間で27.6%減になる.

*北海道科学大学地域社会創生研究所

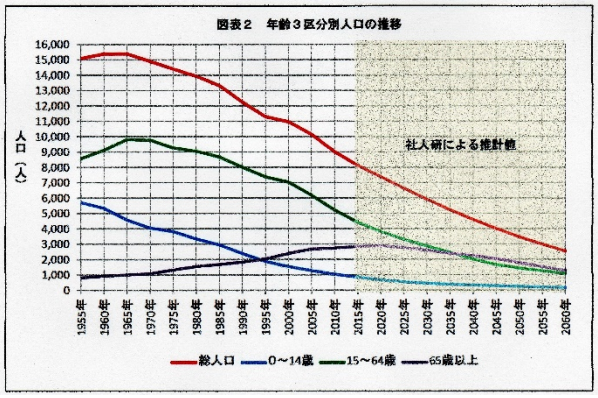

図２　年齢３区分別人口の推移
（出典：江差町人口ビジョン，H28 年３月）

図 2 は，町より入手した江差町人口ビジョン報告書より抜粋した国立社会保障・人口問題研究所による 2015 年以降 2060 年までの人口推計である．このグラフからは，年少人口が年々減少していることから少子化が急激に進んでいることが分かる．また，2035 年には，老年人口が生産年齢人口を上回ると予測されている．このままでは自力で町を維持していくことが困難になると推察される．

3. 観光入込客の動向

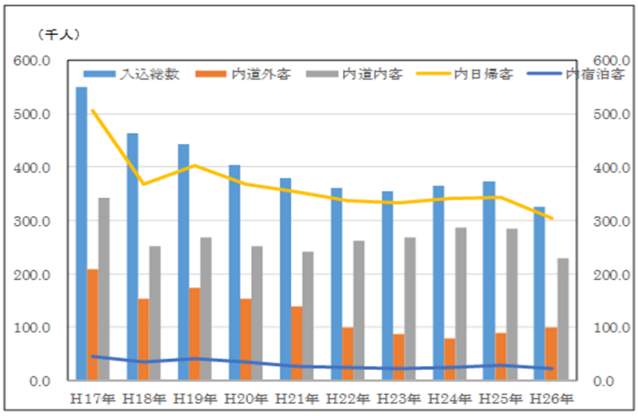

図３　最近の観光入込客動向

最近の観光入込客数の動向を北海道経済部観光局が毎年公開している観光入込客に関するデータより独自集計すると図 3 の結果となる．江差町の観光は，ほとんどが日帰り観光客であり総観光入込客数の内宿泊客が占める割合は平均わずか 7%前後で推移している．

宿泊施設は，過去に十数軒存在していたが現在では９軒が営業している．姥神さんの時期は江差町の人口が 4，5 倍まで膨れ上がるので全く客室が足りない状態になる．

4. 各町内別人口動向

江差町には 24 の町（地区）がある．その内，表 1 と図 4 に示す 13 台の山車を保有・保存する町内は 17 町であり，3 つの町で巡行しているのが義公山（南浜町・柏町・南が丘）と政宗山（緑丘・新地町・円山）の 2 台である．この 2 台を巡行する地区の人口はそれぞれ H27 年:1,336 人，893 人と江差町内では最も多くの人口を有している．

しかし，図 4 に示されているとおりどこの地区も人口は減少してきており，ここ 10 年間における 18 町の年平均人口減少率は 2.25%である．近年 H27 年までの 10 年間で 13 台の山車を管理し，毎年 8 月 9 日～11 日の 3 日間，町内巡行している 18 町内の総人口は実に 1,585 人も減少している．最も減少率が高い町内は，清正山を保存する本町で 34.8%，最も低い政宗山を保存する緑丘・新地町・円山地区の 13.8%とは 21%もの差がある．

表１　13 台の山車を保存する各町内別人口動向

町内会・山車 年代	陣屋町・海岸町	新栄町	愛宕町	豊川町	中歌町	姥神町	津花町	南浜町・柏町・南が丘	茂辰町	橋本町	上野町	本町	緑丘・新地町・円山
	松賀丸	新栄山	神功山	豊榮山	姫子山	豊年山	楠公山	義公山	誉山	聖武山	源氏山	清正山	政宗山
H17年	755	368	218	747	381	129	216	1850	502	178	174	382	1036
H18年	749	371	207	691	365	130	208	1782	493	177	173	364	1046
H19年	733	352	203	680	360	130	204	1733	483	157	168	347	1040
H21年	690	366	197	656	330	124	191	1632	447	146	149	302	984
H22年	671	349	190	628	319	127	187	1579	435	141	142	282	978
H23年	655	340	184	596	319	123	190	1514	433	142	142	283	924
H24年	638	335	187	581	305	116	186	1472	440	134	141	264	911
H25年	630	323	186	569	313	110	173	1431	430	149	133	256	923
H26年	629	318	176	545	310	111	171	1399	430	143	130	251	941
H27年	622	308	171	543	297	108	164	1336	395	135	130	249	893
増減(H17～H27)	133	60	47	204	84	21	52	514	107	43	44	133	143
	17.6%	16.3%	21.6%	27.3%	22.0%	16.3%	24.1%	27.8%	21.3%	24.2%	25.3%	34.8%	13.8%

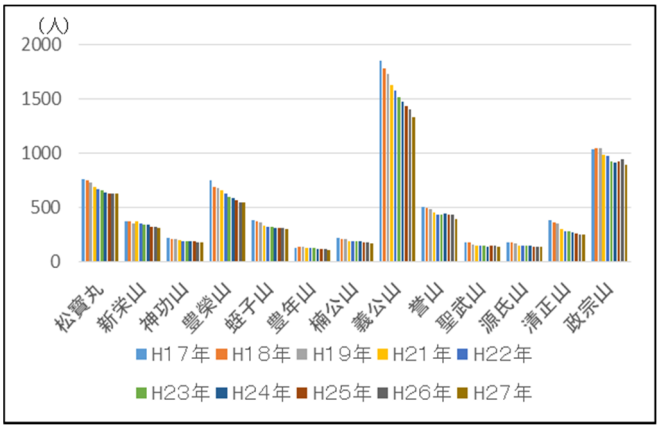

図４　最近の各町内別人口動向

町内人口が最も少ない地区は，豊年山を保存する姥神町で H27 年:108 人である．次いで源氏山の上野町が 130 人，聖武山の橋本町が 135 人となっている．

このように，13 台の山車を長期間保存･維持管理し，毎年決められた 8 月 9～11 日に厳かに町内巡行する各町内間の姥神さんに関わる人数格差は，子ども達の減少とも重なり非常に大きくなってきている．

5. 各町内の山車

神輿の渡御に供奉する現在の山車で最も古い山車は，愛宕町の神功山である．その人形は宝暦 4 年(1754 年)に制作されており，北海道指定有形民俗文化財にも指定されている．

図 5　江差町の 13 台の山車

13 台の各山車には小さい子どもから長老まで役割分担がきちんと決められている．巡行最高責任者は頭取と呼ばれ，頭取は人望が無いと務まらない．一度はそこまで上りつめたい江差人の憧れの役職となっている．

6. 全町民アンケートの結果

山車を保存管理する各 18 の町内（計 2,000 世帯）へのアンケート調査を平成 28 年春に実施した．

①調査実施日：学生 11 名と H28 年 4 月 4 日(月)アンケート用紙を町内各戸へポスティングにより配付

②回収予定日：返信用の封筒により，H28 年 4 月末日までに設定．

③回収結果：町内よってばらつきが多少あるもの実際には 5 月中旬まで返信があり，総数 365 人から回答を得た．

④集計結果：以下に主な集計・分析結果を示す．

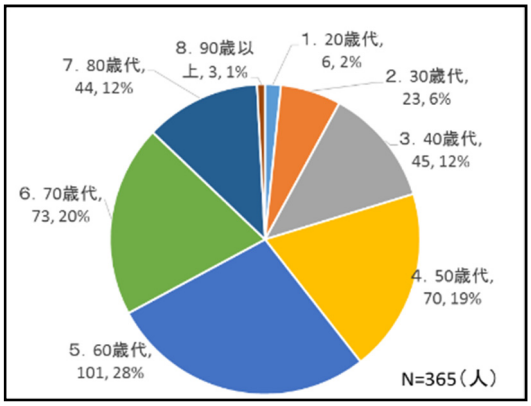

図 6　回答者の年齢構成

最も多かった回答者の年齢層は 60 歳代で全体の 28%（101 人），次いで 70 歳代の 20%（73 人），50 歳代 19%（70 人）である．

50～70 歳代で全体の約 7 割近くを占めている．この回答者属性を見ただけでも町の高齢化がかなり進んでいることが分かる．

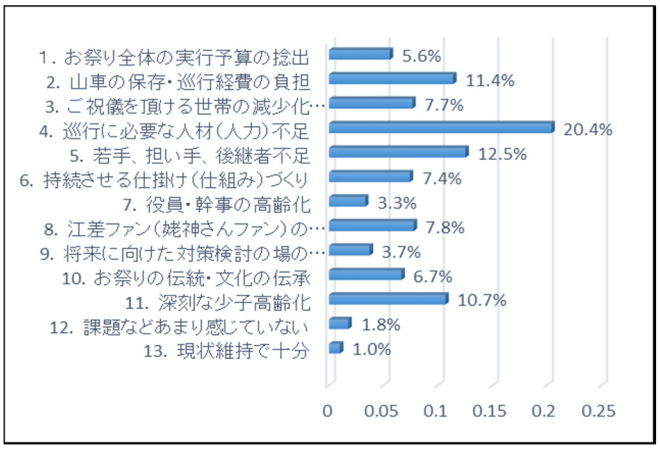

図 7　姥神さんの現状と課題

少子高齢化と人口減少問題に直面している江差町の重要な地域文化資源である姥神さんの現状認識と町民が強く問題視，課題としている部分について聞いてみた．　結果として山車の町内巡行に必要な人材(人力)不足が一番の課題であることが分かった．

通算 12 回学生とフィールドワーク実習も兼ねて参加させて頂いているこの江差町地域連携・交流活動の場では，確実に山車の引き手や巡行スタッフが少ない山車が存在していた．

その他には 10～12%を占めた，「若手・担い手・後継者不足」，「山車の保存・巡行経費の負担」，「深刻な少子高齢化」の 3 つの課題がクローズアップされる．

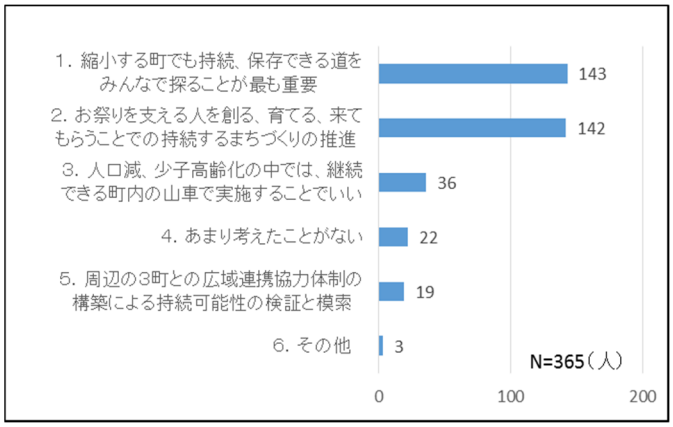

図 8　姥神さんの今後・将来への思い

次に姥神さんの今後・将来について聞いてみたところ上図 8 に示すとおり「縮小する町でも持続，保存できる道をみんなで探ることが最も重要」：143 人と「お祭りを支える人を創る，育てる，来てもらうことでの持続するまちづくりの推進」：142 人という二つの回答が殆どを占める結果が得られた．

合計で 285 人全体の約 8 割もの町民が前向きに現状を理解し，姥神さんを何とか持続させていきたい，行くべきだという強い意志がこの結果から読み取れる．

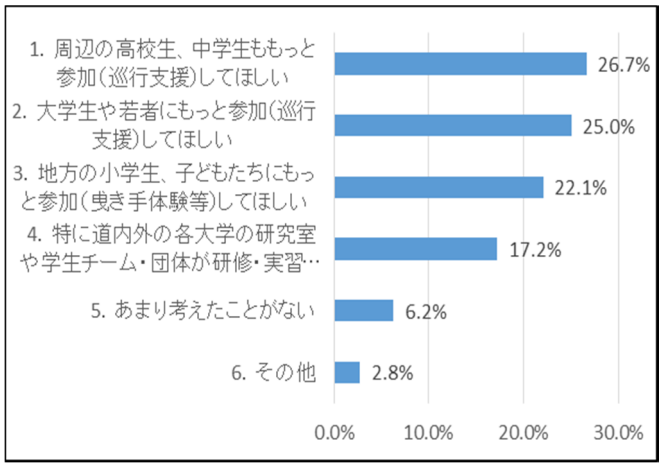

図 9　町外の学生・若者や子ども達の参加について

12 年前から江差町姥神さんの旧中心商店街であった中歌町の山車「蛭子山」町内巡行を重要なまちづくりの現場研修としてサポートしている学生は，昨年までで延べ 129 人である．平均 11 人ほどが毎年一時滞在町民になりきり，8 月のお盆前の 2 日間，江差町で活動・交流している．

そのことも少し影響しているのか，図 9 の設問 10 では「大学生や若者にもっと巡行支援してほしい」と回答した方が 1/4 も占めている．また，「江差町の周辺に住む中高生ももっと参加してほしい」との回答がトップで 26.7%であった．

江差町民は，山車巡行に必要な若者や中高生，そして子ども達まで減少してきている危機的実態を把握しており，姥神さんの将来に対する課題を共有している．

最後の設問で「貴方にとって姥神さんとは？」という問に回答して頂いた．結果は下図 10 のとおりで，自分たちのお祭りに対する文化的価値観や 370 有余年の歴史を持ち，今日まで山車を大事に保存維持し，町内巡行を持続して来たことへの強い誇りと自負が強くうかがえる．

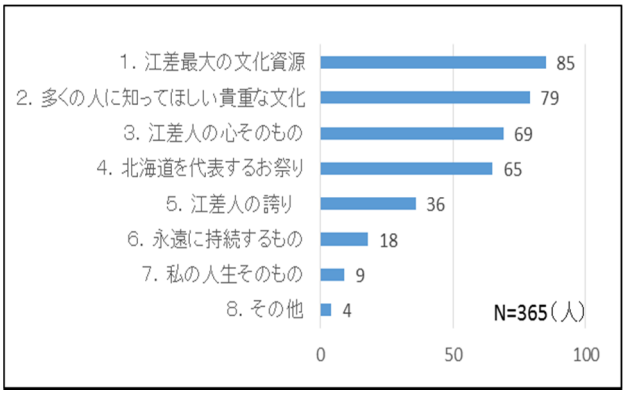

図 10　貴方にとって姥神さんとは

7. ヒアリング調査の結果

アンケート用紙を各戸へポスティングした後から直ぐに地元の姥神さん関係者，巡行最高責任者である頭取経験者など多方面の方々から連絡を受け，H28 年 5 月にヒアリング調査を実施した．その結果から見えた驚きの事実は，ある程度は想定内ではあったものの改めて江差人の姥神さんに対する熱い思いに振れる結果であった．会って直接お話を聞いた方々全員が現在の姥神さん・山車巡行が抱えている課題，問題点をそれぞれの立場，思考できちんと整理し，持ち合わせていたのである．

ヒアリング調査の主な結果は以下の通りである．

①地元出身の若者，30～50 歳代の町出身者が 8 月 9～11 日のお祭り期間に以前ほど帰れなくなってきているという現状＝殆どの方の共通認識．江差町では 30～50

歳代でも若者なのである.
②観光客向けの姥神さんなのか，自分達だけで維持する自分たちの為のお祭りなのかよく考えて議論する必要がある．＝40～50 歳代も一同に集まって話し合う場を設けたい．お祭り（姥神さん）シンポジウムなるもので町民が一堂に集まる企画が重要.
③町内だけでは無理なこと，できないことへの対応策，改善策の検討＝町や関係機関・団体などとの役割分担や支援・協力体制の再構築
④町内巡行をしっかり支援する山車の曳き手を担当・体験したいという来訪者（子どもからお年寄りまで）の増加策と受入れ対応策の検討と実践.

いずれにしても今は，姥神さんの問題や課題がどこにどれだけあって，これから私たちはいつ何をどこでどうやるべきなのか，姥神さんを支える 4 つの組織（神社・実行委員会・頭取会・観光協会）が別々ではなく協働で力を合わせて話し合い，打開策を見出していくという流れを構築する必要が急務であると考える.

8. 学生たちの関わり

前述したが，本研究に取組むきっかけとなったのは 12 年前にゼミ生を 5 人連れて初めて江差町を訪問し，姥神さん中歌町の山車「蛭子山」の曳き手を体験したことから始まる.

中歌町は下図 11 にあるように江差町歴まち商店街と称され，平成元年にスタートした道の「歴史を生かすまちづくり事業」により整備された．平成 16 年 11 月に街路事業が完成し，歴まち地区「いにしえ街道」として街並みが大きく変貌した町内である.

図 11　歴まち地区「いにしえ街道」

旧国道・旧中心商店街であったこの地区は姥神町を含め既存の歴史的建造物や復元された古い町並みで景観整備されており，散策コースにもなっている.

主な学生達の現地での実習は，姥神さんの「蛭子山」巡行に関わることによる地元江差人との交流を通じて，この姥神さんがなぜ 370 有余年も前から続いているのか，持続するまちづくりの原点とその背景を探ることを目的の一つにあげている.

その答えは一概には言えないがおそらく現地に行き，観光客的に沿道でデジカメを片手に観賞すのではなく，姥神さんに直接，地元の若衆や子どもたちと一緒に参加するという実体験でしか分からないと考える.

中歌町「蛭子山」の半纏を着て，2 日間江差の若衆になりきり，地元の方々と一緒に山車巡行をサポートする学生たちの姿は，下図 12 に示すとおりで，山車（蛭子山）の曳き手はもとより，町内の各戸やお店，事業所などを訪問し，山車巡行の費用に充てる寄付金や奉献酒を募る活動も会計担当の若衆として二日目お手伝いしている.

図 12　蛭子山を曳く学生と接待を受ける学生達

9. 考察とまとめ

今後は，まだ分析が完了していない町内 13 台の山車を管理する各町内間のアンケート調査結果の比較から見える意識と維持運営の環境に関する格差や町より入手した各町内別の年齢別人口の推移からも今後の課題と問題点を探り，将来展望についても明らかにしたいと考えている.

現在，若者や中高生と子どもが激減し，山車巡行が大変厳しい状況になっている町内と問題がない町内とでは将来に向けた意識も含めてどんな違いや差があるのか分析する予定である．また，本学が支援する中歌町以外の町内でも同じように町外からの支援学生チームや団体・企業・子ども会チームなどと連携した取組みをしている事例についても追加調査し，姥神さんの持続可能性についての調査・研究成果としてまとめたいと考えている.

参考文献

(1) 江差町観光協会：江差姥神大神宮渡御祭「祭図録」，1999.
(2) 爲岡進：江差姥神大神宮祭礼写真集，2002.
(3) 茂尻誉山記念誌編集委員会：誉山七十年の歩み，1998.
(4) NPO 法人魅せる北海道：姥神大神宮渡御祭，2012.
(5) 江差町：江差町人口ビジョン，2016.